

売薬の意匠あれこれ <その26> 売薬のポスター【その③】

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

今回は前回の明治期～大正期にかけての売薬のポスターに引き続いて昭和期のポスター・広告を取り上げてみます。

63年間も続いた昭和時代はまさに「激動の昭和」であって、特に昭和20年の終戦までの昭和と戦後の43年間の昭和では天変

地異のような変化がありました。

今回紹介します、社会全体の活動からみるとごく一部にすぎない薬のポスター・広告からもそのような「激動の昭和」の変化がみてとれます。

①



②



①「頑張り 勝ち抜け」「きょうも決戦 明日も決戦」という標語から明らかに戦前の対米戦争(太平洋戦争:昭和16年12月～20年8月)当時のポスターです。

上段には日の丸を背景にした鉄鋼生産などに励む労働者の姿と、下段には当時の薬の広告にはよく描かれた「喰いあわせ」の図が書かれています。

喰いあわせは食べ物におけるいわば相互作用のようなもので、すべての喰いあわせが医学的に根拠があるものかとはとかく「西瓜(すいか)と天ぷら」などは油物と水気の多い食べ物の食べ合わせは消化不良を起こす警告と言え、「梅干しと鰻(ウナギ)」はぜいたく品の鰻と粗食の梅干しを一緒に食べるべきではないという道徳的な考えが背景にあるものと思えます。

②上段にはお札の山の前で算盤(そろばん)をはじく大黒様が描かれています。

『古事記』に描かれた「因幡の白兔」に現れる「蒲の穂で傷ついたウサギを治療した」大国主(おおくにぬしのかみ)は薬の神様とされますが、後日大国(おおくに)はダイコクとも読めることから同じ音である七福神の一つの大黒天(大黒様)と重合した結果(神仏重合)大黒様も多くの薬の関係の広告に、特に商売繁盛を願って描かれるようになります。

中段には「金のなる記」が対比するように上には「金のたまる人」、下には「金のたまるぬ人」が書かれています。

また下段には①と同じく喰いあわせの図が書かれています。

③戦前～戦後にかけての治淋内服新薬の広告です。

淋病とは淋菌によって引き起こされる性感染症(STD (Sexually Transmitted Disease))の一種ですが、「淋」(音読み「リン」、訓読み「さびしい」という字には⇒水が絶え間なくしたたるの意味があり、東洋医学ではそのような症状(小便がたらたらと出て止まらず尿意が頻繁にもかかわらず尿量の少なく、排尿中に痛みを感じるなど)を呈する病(前立腺肥大症や、泌尿器系結石、過活動膀胱、膀胱カタル、膀胱炎など)を広く「淋疾」、そのような患者を「淋家」としてとらえていました。よって昔の薬の広告に「淋病に有効」とあってもその薬は必ずしも淋菌による「淋病」の専門薬ではないことに注意が必要ですが、このポスターの場合は患者の男性の背後に写る影絵から察してSTD専門薬の広告といえます。

④昭和3年(戊(つちのえ)辰(たつ))の年の年中行事の書かれたカレンダーを描いたポスター。戊辰とは十干十二支(じっかんじゅうにし)でその年をあらわしたもので、十干十二支(干支)とは中国から伝わった十干(甲乙丙丁…)と十二支(子牛寅卯辰…)を組合わせて60年で一巡します。よって元の暦に還ることから人生60歳の節目を選暦と称します。

⑤「安川コロダイン」は神薬とともにクロロホルム、エーテル、エタノールなどを含有した気付け、暑気あたり、腹痛、船・車酔いなどに効果のあった「仁丹」のような黒褐色の液体の製剤。同名の「〇〇神薬」や「〇〇コロダイン」は配置売薬の世界では多数存在しましたが、現在では本家を含めて入手困難です。

⑥「一生懸命努力する」「はたらくことを惜しまない」等々、日本人が大切にしている特質や姿をたくさん持っていた二宮尊徳翁は、修身勉強・孝行・自立・勤勉などの象徴として、今でも一部の学校の校庭には「二宮金次郎(二宮尊徳)」の像が置かれています。(歩きスマホとは違いますが)

⑥



⑤

